

小規模 OA 学術出版という試み

～定量的議論へ進む前の感想として～

飯澤 正登実 

合同会社 Liberality やまなみ書房

2025 年 11 月 6 日

研究イノベーション学会 第 40 回年次学術大会
企画セッション「学術書のオープンアクセスについて考える」

This slide is licensed under [the Creative Commons Attribution 4.0 International License](https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/). © 2025 Masatomi Iizawa

- ① やまなみ書房とは？
- ② 学術出版界の現状（感想）
- ③ 理系（物理系）読者の立場からの出版界に対する感想
- ④ 読者層の人々の行動パターン
- ⑤ 学術書の OA 出版に期待できること
- ⑥ 学術書の OA 出版を対象とする研究に期待したいこと
- ⑦ 学術書の OA 出版 (+ α) にまつわる感想めいたこと

1 やまなみ書房とは？

| 2

- ▶ 理工系の（実験的）学術出版者
- ▶ オープンアクセス (OA) 専業
- ▶ オンデマンド出版専業（在庫管理を抑制するため）
- ▶ 紙媒体の出版物を海外頒布可能な体制を整備
- ▶ 全出版物に DOI を付与
- ▶ 広い読者層を持つコンテンツの制作を狙うのではなく、潜在読者が少ない／存在しないジャンルを、出版によって掘り起こすことを目標としている
- ▶ 2018 年 活動開始
- ▶ 2023 年 合同会社 Liberality に業務移管（やまなみ書房代表者の兼業規制のため）

代表者の専門は物理（ポスドク）

2 学術出版界の現状（感想）

※定量的検討ではなく私個人の感想

- ▶ 出版・取次・印刷とも、斜陽産業を越えて水没しかかっている。余命宣告状態。持続可能性はすでにない。(残す道は M&A による延命・多数の imprint を 1 社に集結させコングロマリット化)
 - > 純学術書：身内（分野内の研究者）が購入することを前提に価格設定。いわゆる「集団自費出版」。身内の購入冊数が落ちることで仕組みが崩壊。
 - > 教科書：再販制度を駆使した自転車操業状態。新刊本をたくさん出し、取次に流すことで債務を返済。返本が来る前にさらに新刊本を取次に流して返品精算の資金を確保。
- ▶ 出版原価の高騰に、書籍の値上げが追いついていない。書籍の値上げが進んでいるが、原価（用紙・インク etc.）はそれ以上に上がっている。
- ▶ 資金繰りの問題で、売れても増刷できない。

参考（学術出版社（者）のリアルな声）：日本史の学術出版社 岩田書院の「新刊ニュース裏だより」

<http://www.iwata-shoin.co.jp/backnews/uratop.html>

3 理系（物理系）読者の立場からの出版界に対する感想

- ▶ そもそも日本語の学術書を読むことがなくなっている
 - > 近年の優れた書き手は、学術書を日本語で書かない傾向がある。
 - > 小・中規模（～100 ページ）のサーベイであれば、書籍にはせずレビュージャーナルに投稿する。求めている文章は、書籍ではなく主にジャーナル、あるいは論文集に投稿されている。
- ▶ すぐに手に入らない・入手に手数がかかる
 - > 学術書の蔵書を十分備えている図書館は限られている。
 - 国立研究所の図書館は一般にきわめて小規模。
 - 小～中規模の大学図書館は理工系学術書の蔵書が少ない。
 - 旧帝大の図書館は、各部署の図書館に蔵書が分散していて当日中に書籍が手に入らないことがある。（蛇足的注：購入者が旧帝大図書館だけだったら7冊しか売れない）
 - > すぐ絶版になる
 - 物理で最も重要な教科書の一つ いわゆるランダウ＝リフシッツの『理論物理学教程』の邦訳ですら絶版。古書はプレミアム価格。
 - > 学術書の読者層（学生／研究者）は相当な貧困状態。
 - 衣食も足りていないような学生／研究者が多い。学術書を気軽に購入出来る学生／研究者は限られている。個人・家庭の状況によっては学振 DC に採用されても苛烈な貧困。大学院生／研究者の貧困に関する定量的なサーヴェイは見当たらない。（全く関係ない蛇足的注：「大学院生におけるメンタルヘルス問題について」, 人文×社会, 1,107(2021)
<https://doi.org/10.50942/jinbunxshakai.1.1.107>)

- ▶ 求めている内容を含む文章を探しているとき（主に物理のケース）
 - > その内容が書かれている文章が論文であったら、それをダウンロードする。
 - > マイナーな学術誌や論文集に掲載されている論文であったら、今すぐ容易に入手できない可能性が出てくるのでブルーな気持ちになる。多忙であれば入手を後回しにする。
 - > 書籍の場合、入手しやすさが下がるのでさらに気持ちが落ちる。（もちろん、著名な著作であれば入手は容易なので例外）
- ▶ 海賊版サイト利用の常態化 “Black Open Access”
 - > 「論文海賊サイト Sci-Hub を巡る動向と日本における利用実態」, 情報の科学と技術 68, 513 (2018) https://doi.org/10.18919/jkg.68.10_513
 - > 「論文海賊版サイト、日本の違法ダウンロード 720 万件 5年で5倍超」, 毎日新聞, 2023/6/6 <https://mainichi.jp/articles/20230605/k00/00m/040/113000c>
 - > The Unbelievable Scale of AI's Pirated-Books Problem, the Atlantic, 2025/3/20 <https://www.theatlantic.com/technology/archive/2025/03/libgen-meta-openai/682093/>

5 学術書の OA 出版に期待できること

- ▶ 複製・再頒布を自由化することで、コンテンツの保全性が向上する。
 - > (クローズドな) 紙媒体のみの場合：特定の大型図書館のみ蔵書する可能性が高い。災害・政変による消失の可能性。絶版による入手困難が極めて生じやすい。
 - > クローズドな電子媒体のみの場合：プラットフォーム (ストア/DRM) の方針によって消失する可能性。
 - > 海賊版に頼る情報保全から脱却するには OA 化は不可避
- ▶ OA 化した方が読者にリーチしやすくなり、結果的に紙版の売り上げが上がった、という統計がある…はず (文献失念, 2018 年前後)
- ▶ 「OA は有益」なのではなく、そもそもクローズドなシステムが学術界に有害なのでは？
 - > cf. Lawrence Lessig, RMS らによる一連の主張
- ▶ 「集団自費出版」のコミュニティー外からも読者を得られる可能性がある。思わぬ繋がり・連携に発展する可能性。(新たな角度から “古典” 的著作が生まれる可能性?)

6 学術書の OA 出版を対象とする研究に期待したいこと

- ▶ OA 出版は様々な仕組みと複雑に関連しており、単独で議論することが難しい。専門家による定量的なサーヴェイを期待したい。
 - > 海賊版の横行：みんなが海賊版を使っている現状では、OA にすることのインパクトが失われる。あるいは OA にしない価値が失われる。
 - > 科研費のありかた：欧米では科研費の成果物を OA 誌以外に投稿することを禁止されているケースが多い。学術書は…？
 - > 出版助成：ドイツでは論文投稿すると OA の手数料 (APC) を図書館が自動的に払ってくれるので、OA で出版することにハードルが全く無い。学術書は…？
 - > 研究者評価基準：単行本は業績になるのか、翻訳は業績になるのか。altmetrics など（ブログやニュースサイトへの掲載件数など）の影響は？ etc.
 - > LLM 学習への利用
 - > 電子出版、オンデマンド出版との兼ね合い
 - > 組版手法の変遷：TeX から XML/CSS 組版へ移行して媒体を問わずに統一的な組版が可能に etc.
- ▶ 海外の先行事例に関する包括的なまとめがほしい。
- ▶ 国内の研究者・出版者で、学術書の OA 出版について知見／関心がある人はどのくらいいるのだろうか。盛り上がっていないのではなく、知見がないだけでは？

7 学術書の OA 出版 (+ α) にまつわる感想めいたこと

- ▶ 学術書・学術出版に、学術界がどのような機能を求めているのかを明瞭化すべき。単に出版社ブランドを求めている？ 権威？
- ▶ 消費者（読者？ 著者？）は出版物に投資する価値をどこに求めているのか？ OA化はその価値を増幅するのか？
- ▶ 編集・組版・印刷・広報のそれぞれにどのような機能を求めているのか？「出版」として纏めず、バラして考えてみては。
（「出版者」は必要なのか？）
- ▶ 組版・印刷・広報については共通のプラットフォームを用意し、編集のみ各分野（・各大学？・各学会？）で担当者を当ててみては？
（書籍版 J-Stage?）
- ▶ 学術コンテンツの場合、OA にしないメリットがどこにあるのか不明である。（権利関係が複雑なコンテンツは例外）。Close にすることで、収益が上がり持続可能な出版が可能になるとは考え難い。
- ▶ 出版はすでに参入障壁が下がっているから、実際に自分でやってみるといい。参入障壁が下がっていることは、質の高いコンテンツの制作可能性の向上とは結びつかないことに注意すべきである。
- ▶ 色々な試みを行うに際して、大学や研究所の兼業規制は有害。すぐに廃止すべき。